

「くらやみマンションS.O.S」

柴田 勝家

1.

これは僕が小学三年生の時の話だ。

その頃、僕の住むマンションで変な噂が流行ってた。それはマンションの中に「くらやみ階」という謎の空間があって、そこに住む「闇人(やみひと)」に見つかると異世界へと連れ去られる、っていう内容だ。

僕と、みつつん、フクロ。同じマンションに暮らす三人は、そんな噂をめぐって小さな事件に遭遇したんだ。

始まりは社会科の授業だった。「自分たちが食べるものについて調べよう」という課題が出された。班に分かれて、図書館で調べたり、近くのスーパーに話を聞きに行ったりするやつだった。それで最後は大きな模造紙にマジックペンで研究成果を書き込んで、一週間後に発表。正直に言えば、少し面倒だった。

だって、その頃の僕らは野菜がどこで出来るか想像もしてなかったからだ。

「なあ、野菜ってどこで取れるの？ 山？」

そう言ったのは友達のみつつんで、彼は元気が取り柄のお調子者。

「ウチは宅配で届いてるよ」

これは友達のフクロ。おっとりしているが真面目で優しい。

「野菜は畑で取れるんだよ。逆に、お米が取れるのが田んぼだ」

「へえ、やっぱイサは物知りだな！」

みつつんの賞賛とフクロの拍手に、僕は自慢げに頷いてみせた。

「でも、畑なんて近くにないよね」

「だよな。父ちゃんが見てたテレビに映ってたけど、あれ遠くの山だったよ」

「とりあえず図書館で調べるのは？」

学校からの帰り道、僕の言葉を聞いたフクロが手帳を開く。中に入っている電子ペーパーを使って最寄りの図書館を検索中。先生は「紙の本を使って調べよう」なんて言ってたけど、その図書館に本が残ってるかどうかをネットで調べる必要がある。本末転倒だ。

「そもそもペーパーじゃない紙にマジックでどう書けばいいんだ？ ちゃちゃつとネットの素材使えばいいだろ」

「自分の手で書くことでレイアウトやデザインの勉強になるんだよ。先生が言ってたよ」
みつつんのボヤキに僕が答えておく。一方、フクロは真剣な様子で「野菜」に関する本を探しているようだった。だけど、小学生向けの本はなかなか置いてないらしく、難しそうな畑の作り方みたいな本ばかりが出てきたらしい。

だから僕ら三人は悩むばかりだった。別の班が羨ましかった。肉や魚を選んだ同級生たちは、最初から図書館で済ませると言っていたし、先生もそれを認めていた。でも野菜を選んだ僕らには「近くの農家さんに聞きなさい」と言って、楽に終わらせることを許さなかった。それはどうやら、最初から図書館には「野菜」に関する情報が少ないという意味だったのかもしれない。

「これはきつと、陰謀だぞ」

三人でマンション前の公園で遊びつつ、みつつんがそんなことを言い出した。

「オレらさ、給食の野菜、ずっと残してただろ」

「残してたね」

「だから先生は、オレらにイジワルしてんだよ」

僕は先生が好きだったから「そんなことはない」と言いそうになった。だけど、すべり台の上から盛り上がる二人を見ていると、あり得るかも、という気持ちの方が勝ってきたから黙っていた。

「野菜のこと調べるのに、遠くに行けないしな」

みつつんが嘆いたところで、五時を報せるチャイムが聞こえてきた。夕暮れの公園に街灯が光り始めた。そろそろ家に帰ろうと、僕は二人に声をかけようとした。

でも、その時に不思議なものを見たんだ。

「あれ、変な光だ」

僕らの家がある十二階建てのマンション、その真ん中くらいでユラユラと光が揺れていた。それ以上に奇妙だったのは、変な光が消えたのと同時に、その階の全ての明かりが消えたことだ。上下の階には部屋の明かりがあるけど、まるごと一つの階が真っ暗なまま。

「くらやみ階だ」

最初にそう言ったのは、フクロだった。

2.

フクロには六年生のお姉ちゃんがいて、僕らもたまに一緒に遊んでもらうことがある。

「へえ、くらやみ階を見たんだ」

翌日、僕とみつんはフクロの家に遊びに行つて、この間、夕方に見た変な階層のことを話し合っていた。フクロは「くらやみ階」という言葉をお姉ちゃんから聞いたというので、そのことを尋ねてみた。

「あれを見たら、もうダメだ。君たちは闇人に狙われてるよ」

フクロのお姉ちゃんは、ジュースを飲みながらそう告げてきた。

「闇人って、なんだ？」

「くらやみ階の住人だよ。この世界とは違う、暗闇の世界に住んでる。知ってる？ この世界にはね、色んな場所に暗闇の世界の入り口があるんだよ。それで午後五時になると、二つの世界が一瞬だけつながっちゃうんだ。そこに入ったら出てこれない」

そんなことを言うフクロのお姉ちゃんに対して、僕は最初に怯えて、次には「そんなの嘘だ！」と反発しなくなった。だから、みつんはこんなことを言い出した。

「いいよ、くらやみ階を確かめてやるよ！」

ニヤニヤと笑うフクロのお姉ちゃんに見送られ、僕はマンション前の公園へと向かった。そこで自分たちの住んでるマンションを見上げても、昨日の夕方に見た「くらやみ階」らしきものは見当たらない。建物は同じ形の箱が積み重なっただけに見える。

「あ、見て！」

フクロがすべり台の上から叫んだ。時刻は午後五時だ。「くらやみ階」の現れるという瞬間。外が暗くなり、マンションの部屋の明かりが目立つ中、その階だけが真っ暗なままだった。

「イサ、何階か数えるぞ！」

「うん、えっと」

僕はマンションを下から数えた。ちょうど六階が「くらやみ階」になっていた。

それを確かめてから、僕は再びマンションへと戻り、エレベーターへと乗り込む。勢いのまま六階のボタンを押したけど、みつんもフクロも怯えているようだった。僕も同じで、このままエレベーターが「くらやみ階」につながって、異世界へと入ってしまったらどうしよう、と思った。

しかし、そんなことにはならなかった。

「あれ、三井君。伊崎君と袋井君も一緒？」

僕らが六階に降り立った時、ちょうど買い物袋を持った女性と出会った。森長のおばさんだ。この人は六階に住んでいたはず。

「あ、あの！」

声を上げたのはみつつんだった。彼は七階に住んでいるから、森長のおばさんを一番よく知っている。

「森長のおばさん、部屋、明かりついてますか！」

六階の共用廊下は明るいままだ。ここが「くらやみ階」だとは思えない。だとすれば、部屋の電灯を消しているのだと推理した。でも、そんなことがあるだろうか。この六階に住む人が全員、揃って明かりを消しているなんて。

「あ、そうそう、買い物行くけど、つけっぱなし。節電しなきゃね」

案の定、森長のおばさんは部屋の明かりをつけているという。それなら、僕らが見た真つ暗な六階はなんだったのだ。森長のおばさんは挨拶を残してエレベーターに乗り込んだが、残された僕らはお互いに無言だった。

「きつと、階数を間違えたんだ」

ようやく、みつつんが口を開いた。そして三人でエレベーターに乗って、今度は七階へ向かった。でも変わらず、ここも廊下に明かりがついている。じゃあ、と五階へ。しかし、ここでも結果は同じだった。

僕らは「くらやみ階」を探して、何度もエレベーターで移動した。それが続いて、三階に来た時に、不意に共用廊下を歩いてくる人物と目が合った。

「あんまり、エレベーターで遊んじゃいけないよ」

その人物は長い黒髪の若い男の人で、服装は黒い帽子に黒いマント。全身が黒尽くめの人。今まで、このマンションで見たことのない人間だった。

「ね、いい子だからさ」

黒尽くめの人は笑顔のまま、僕らをエレベーターへと追い込んだ。フクロは後ずさりをして、いたし、みつつんは何度もエレベーターのボタンを押していた。その時、僕らは同じことを考えていたと思う。

闇人に見つかった！

3.

それから数日、僕らは闇人を見かけるようになっていた。

朝に学校へ行く時もそうだし、夕方に帰ってきた時も見かけた。平日も、休みの日も、あの黒尽くめの男の人はマンションにいた。働いているなら、どこかのタイミングで出かけるはずなのに、その人はずっとマンションの中にいる。

「だから闇人だって？」

ある日の食卓で、僕はつい父親にそのことを話してしまった。いつでもマンションにいる怪人。くらやみの世界に暮らす闇人。そんなことを真剣に語ってみれば、父親は大笑いしてきた。

「あれは米良さんだよ。米良カツキさん。最近、このマンションに越してきたんだ。だから見かけなかっただけだ」

父親は簡単に言うけど、僕はどうしても納得できなかった。夕飯に出された野菜炒めだつて、口にしようと思えなかった。単純に野菜が嫌いなのもあったけど。

「あんまり米良さんに迷惑をかけるなよ」

その言葉も信じられなかった。僕の父親はかなり適当な人で、同じマンションに暮らす人でも、住んでる階が違うと名前を覚えようとしない。それなのに、一階に暮らしているという闇人――米良さんのことはフルネームで覚えている。

奇妙だ、と思いながら野菜炒めに箸をつけた。すると、その瞬間に社会科の課題のことを思い出した。最近「くらやみ階」のことで頭がいっぱいだったけど、発表はもう明後日に迫っている。

「ねえ、この野菜ってどこから来てるの？」

だから、噂話のことはいったん忘れて、野菜についての話を聞こうと思った。

「どこって、ウチはどこと契約してたっけ？」

父親が隣にいる母親に尋ねていた。母親は僕の知らない名前を出して、どこそこのジャガイモが美味しいとか、小松菜の色味がよそと違うとか、色々と言っていた。どうやら我が家もフクロの家と同じく、遠くの農家から取り寄せているのだろう、と思った。

でも、父親は笑って、僕にこんなことを言ってきた。

「ウチの野菜はな、このマンションで出たいらないものから出来てるんだよ」

「いらないものって？」

「大体は生ゴミだな。後は紙ゴミもあるし、なんでもある。とにかくいらないものだ」

不意に、僕は父親の笑顔が恐ろしいもののように見えた。

「お前もいい子でいるんだぞ。いらなくなったら、マンションのダストボックスに捨てて、新鮮な野菜に変えてもらうからな」

思わず手が止まって、箸でつかんでいた野菜が落ちた。

「そういえば、そろそろ米良さんとも契約したいね」

横から母親がそんなことを言い出した。契約の意味はわからなかったけど、たとえば、悪魔との契約みたいな話だとしたら。

「ごちそうさま」

両親はすでに、あの闇人に取り憑かれているのかもしれない。そんな不安がどんどん増えていく。僕は自分の部屋にこもって、ペーパーを使ってチャットを開いた。話し相手はいつもと同じ、みつつんとフクロだ。

ただ、既に事件は起きていたんだ。僕がチャットの画面を開いた直後、みつつんからのメッセージが届いた。

『たすけて。くらやみ階に閉じ込められた!』

4.

僕はフクロと連絡を取って、マンションのエントランスで集合した。

「みつつんが、くらやみ階に閉じ込められたって」

心配そうなフクロを勇気づけながら、僕はチャットでみつつんとやり取りを続ける。

『そこはどこかわかる?』

『わかんない。真っ暗なんだ。変な草がある。異世界の草だよ』

『どうやってそこに入ったの?』

『闇人がいたから、あとを追って、階段をのぼって』

変なところでチャットが止まった。その直後、みつつんから絶望的な言葉が返ってきた。

『充電きれそう』

その言葉を最後に、僕ら二人からの呼びかけにみつつんの既読がつくことはなかった。

「どうしよう、イサ」

「僕らでみつつんを探そう。闇人のあとを追うんだ」

作戦は簡単だった。一階に住んではずの闇人——米良さんを追って、彼が本当に暮らしている「くらやみ階」へと入る。だから僕らは一階の玄関が見える自転車置き場に隠れて、彼が出てくるのを待った。

で、それから数分もしないうちに。

「来た」

フクロが小さく呟いた。見れば、米良さんが玄関を開けて共用廊下へ出てきたところだった。黒尽くめの服は変わらないけど、普段は見えない荷物を手に持っている。

「追おう」

僕らは米良さんを追ったけど、大それた動きなんて何もなかった。米良さんは廊下を突き当たりまで歩くと、普段は入れないゴミ捨て場の門を開け、その奥へ進んでいった。僕とフ

クロは彼に気づかれないよう、少し距離を取って、同じようにゴミ捨て場へと入っていく。
「あれ、エレベーターだ」

狭いスペースの奥にエレベーターがあった。いつも使っているものとは違って、扉は大きくて、横に広いようだった。近くにゴミを乗せる大型のカートがあるから、これと一緒に入れるようになっていたのだろう、と思った。

「行こう、闇人もこれに乗ったんだ」

そして僕らもエレベーターに乗り込むが、そこで奇妙なことに気づいた。

「イサ、見て！ ボタンが！」

「十三階まで、ある！」

このマンションは十二階建てだ。それなのに一階多い。それなら、答えは一つ。僕は意を決して、六階のボタンを押した。

そして、次にエレベーターの扉が開いた時、そこには真っ暗な空間が広がっていた。

「みつつーん！」

僕らの震え声が「くらやみ階」に響く。ついに来てしまったのだ。帰れないかもしれない。でも、友達を見捨てるわけにはいかない。

僕とフクロは携帯端末の明かりをたよりに、真っ暗な空間を進む。よく観察してみれば、空間の作り自体はマンションの他の階と似ている。ただ個別の部屋はないし、誰かが暮らしている形跡もない。

そんなことを思っていた矢先のことだった。

「何をしているんだ」

背後から声をかけられ、僕とフクロは悲鳴を上げてしまった。振り返ることも出来ない。きつと、米良さんは本性を現して僕らを異世界へと引きずり込むのだ。

「見られたなら、仕方ない」

怯える僕の肩に手が触れた。いよいよかと覚悟し、ゆっくりと後ろを見る。

すると、そこには全身を白い作業服で覆った米良さんと、なんとも呑気な表情で笑っているみつつんがいた。

「よう、二人も来たか！」

歯を見せて笑うみつつんの姿に、僕らは安堵の溜め息を吐いた。

5.

「僕はね、宅地栽培士をやってるんだ」

懐中電灯で通路を照らしながら、米良さんはそんなことを言う。

「宅地、つまり人が住んでるところで、栽培、野菜を育てる専門家なのさ」

はあ、と僕がなんとか事態を飲み込もうとする。みつつんは既に事情を知っているのか、米良さんと並んで暗い廊下を歩いている。

「都市部の野菜っていうのは、大体が栽培工場で作ってるんだけど、その工場とマンションを組み合わせるのが最近の流行りでね、ここもそうした物件だよ」

そう言いつつ米良さんは一つの扉の前に立ち、端末をかざしてロックを解除していた。重そうな扉が開かれると、それまでの暗闇に明るい光が溢れてきた。

「で、このマンションで野菜の栽培を任されてただけど、これはなかなか見せられなくてね」

皆で明るい部屋へと入っていく。天井は低くて、小学生の僕らは平気だったけど、米良さんは少し窮屈そうだった。ただ、それよりも目を引くのが、教室の机みたいに並ぶ大量の白い箱たちだった。

「ここでは、黄ニラを栽培しているんだ」

部屋いっぱいにある白い箱からは、見たこともない野菜が飛び出していた。これがみつつんの言っていた異世界の草の正体なのだろう。

「黄ニラは日光を当てずに育てるからね、窓から太陽の光が入らないようにする必要があったんだよ。それで、君らは『くらやみ階』なんてものを想像したんだ」

僕とフクロがみつつんに視線を向ける。どうやら米良さんに大体のことを話していたらしい。

「でも驚いたな。まさか住んでるのに、このマンション栽培のこと知らなかったなんて。いや、そんなもんか。僕も君らくらいの時には、魚っていうのは切り身のまま海を泳いでると思ってたからね」

そこでみつつんとフクロが二人で笑った。

「そんなわけないじゃん！」

「魚はちゃんと魚だよねえ」

結局、奇妙なものの正体なんてこんなものだ。マンションに暮らす大人や、少し年上の子供でも知っていることで、ただ僕らがそれを知ったのが今だったというだけ。

「はは、ごめんごめん。ウチでは野菜だけど、他のマンションだと肉や魚を作ってるところもあるからさ。このこと似たようなマンションの部屋を使って、培養肉を沢山作ってたり、海産物の養殖してたりもするよ。僕が知ってるところだと、マンションの中で釣りができて、

そのまま魚を食べられるところもあったな」

「なんだそれ、住みてえ！ 肉も食べ放題なの？！」

と、大盛りあがりのみつつん。

「いいよね、でも残念だな、この近くだと肉や魚を作ってる複合マンションはなかったかな。大体は野菜みたいだね」

そうか、と思わず声を出してしまった。

社会科の発表で、肉や魚を調べる班が図書館を使うように言われた理由がわかった。それに、先生が「近くの農家さんに聞きなさい」と言ったのは、この米良さんのような人に話を聞けという意味だったのだ。先生はウチのマンションのことを知っているから、最初から近くに聞く相手がいると思っていたのだ。やっぱりイジワルでも陰謀でもなかった。

「あの、野菜って、マンションで作ってるんですか？」

今となつては「くらやみ階」の謎も解けた。だから、僕は純粹に野菜についての疑問を米良さんに尋ねていた。

「今はね。街に畑がなくなっちゃったのと、遠くから野菜を運ぶのが珍しくなったから、こうして人の住んでる空間の隙間で野菜を作ってるんだ。離れたところから荷物を運ぶとお金もエネルギーもかかっちゃうからね、近い方がいいんだ」

それに、と米良さんは部屋の隅においてあるゴミ収集用カートを指差した。

「マンションの住人が捨てたゴミとかも、畑の肥料になるから、こっちの方が楽なんだ」

「ああ」と頷いた。それと同時に、適当なことを言った父親へのちよつとの怒り。いらぬものの、つまり家から出るゴミが畑の肥料になって野菜になる、というだけの話だった。

「マンションから出るゴミはね、微生物の働きで高速で分解されて、エネルギーになったり、肥料になったりするんだ。これは凄いいよ、マンションごとに住んでる人、つまり一人暮らしの人とか、家族で住んでる人とか、そういった種類が違うから、出てくるゴミも違ってきてね。すると肥料も変わって、出来る野菜も変わるんだ。マンションごとにブランド野菜、個性のある野菜が作られる時代さ」

どうやら米良さんは本当に野菜のことが好きらしい。それから僕らの反応も無視して、いかに美味しい野菜が作れるか実験中だと言ってきた。

「でもまあ、そろそろ完成かな。この黄ニラのブランドが出来たら、皆の家とも契約して、新鮮な野菜を届けられると思うよ」

そうだな、と米良さんが顎に指を当てて少し悩む素振りを見せた。

「ブランド名も決めたよ。『くらやみマンションの黄ニラ』にしようか」

6.

中学生になった今、家から少し離れたスーパーに買い物に行くことがある。

そこは不動産会社と一体型になった店舗で、各地の宅地栽培農家と契約し、マンションブランド野菜を多く取り扱っている。美味しい野菜を気に入ったお客さんが、そのままマンションの入居契約も済ませることもあるらしい。

「意外と売れてんじゃん」

僕は陳列された野菜の中から『くらやみマンションの黄ニラ』を手にとった。生産者の顔として写っているのは米良さんだが、商品のパッケージには三人の子供が笑っている姿が描かれている。そのモデルが誰かは言わずもな、だ。

「少し恥ずかしいけどね」

パッケージの裏を見ればコードがあり、それは黄ニラの管理栽培法とマンション住民向けの生活アドバイスを伝えるデータセットにアクセスできる。これを読み取って契約すれば、全国どこでも『くらやみマンションの黄ニラ』が栽培できる。もちろん、その土地ごとに味は変わるけど、この野菜が多く広まるほどに価値は上がっていく。それによって僕らの暮らすマンションの価値も上がるらしいけど、だからといって僕らの恥ずかしい勘違いが広まるのは勘弁だ。

結局、あの小さな事件が僕らに与えた衝撃は大きすぎたようで、社会科の授業での発表はまとまりのない、散々なものになってしまった。それでも、楽しかった思い出はずっと残っているらしく。

「あれ、イサも買い物？」

「おひさー」

声に振り返れば、今でも仲良くしている二人の友達の姿。

